明治29年上川沿（豊川）入植時の記録
『イワケシュ郷土史』からの抜粋・編集

（略）明治29年6月頃、大分県人の森本丑太郎は浜岡由良之助と共に、同県人谷川経十郎と三沢佐太郎らが東1線11号から13号間にそれぞれ入植した。11月になり、空知郡から斉藤鉄四郎が基線9号に、また12月には厚岸郡から長浜一郎が基線14号に、その他大野岩造、中野松太郎、加藤儀三郎らが相次いで入植するにいたり、イワケシュ郷土開拓の創始者の役割を果たすことになる。（略）

当時、常呂浜から道路もなく、ただ測量時に使用したと思われる常呂川に沿った細い小道があるのみで、この道を幾日か通って掘っ立て小屋か三角小屋を建てて住居にしたという。

（注：明治26年　常呂原野の測量も進み、基線及び各号線が決定し、下常呂原野と名付けられた）

（略）その家は、まず手頃な丸木を切り小屋に組み立て、屋根はクマザサや葦を刈り集めて雨よけにしたという。窓はなく、わずかに切り取ったところへムシロをたれ下げてしのぎ、障子があれば上等級であった。戸口はもちろんムシロづくりであり、寒気の厳しい時は二重三重にして朝夕をしのいだ。

開墾作業は入植前の想像を絶し、桂、ヤチダモ、ハンノキなどの大木が春の日を受けて生い茂り、巨木の枝は空いっぱいに広がって昼なお暗い密林の中で毎日立木切りと火焼きの苦闘が続いた。

入植者が手にする農機具といっても粗末な鋸、斧、鎌、鍬などのたぐいであり、豆だらけの手によって耕地はわずかずつ開かれていったが、巨木の株間をぬってソバ、麦、菜種どが順次蒔かれていった。ともかく、春から夏、秋を通して毎日が開墾の連続であったといわれる。（略）

明治30年、高知県人西村長弥、岡山県人高橋楯郎、福島県人本田藤太郎の各氏が入地して上川沿部落が構成された。